

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 21 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730613

研究課題名(和文) 幼児・児童の表現における記号的媒介過程に着目した自己の発達理論と教育実践との接続

研究課題名(英文) How children's presentational selves develop in semiotically mediated processes: A theoretical inquiry with a focus on school education

研究代表者

小松 孝至 (KOMATSU, Koji)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60324886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：子どもの自己の発達は、学校教育でも目標の一つとされてきたが、それをいかなる方法・理論的枠組みでとらえるのかの十分な議論はなされていない。本研究は、研究代表者が記号的媒介(Valsiner, 2007)の理論から構成した子どもの自己への理論的アプローチ(Presentational Self, Komatsu, 2010)の概念を精緻化しつつ、特に学校教育の中で子どもが示す様々な表現、例えば日記指導での子どもの表現や6年生の国語授業における自身の考えの表明から、いかに子どもの自己を見出せるかを質的に分析するとともに理論的に考察し、表現の中に子どもの固有性が明確になるプロセスを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study inquired into the process in which children's selves emerge, with a specific focus on school education. I analyzed children's personal stories written as their homework assignment and children's discussions recorded in Japanese language classes in the 6th grade, using the theoretical framework of presentational self (Komatsu, 2010) derived from the concept of semiotic mediation (Valsiner, 2007). The analysis exemplified how unique perspective of each child becomes clear in his/her meaning construction. For example, the analysis of children's personal stories showed that children's writing fine details of events or the relationship among several events clarifies their presentational selves for readers. Along with these qualitative analyses, a theoretical discussion that compares the framework of presentational self and existing theories on children's self was developed.

研究分野：発達心理学

キーワード：児童 幼児 自己 発達心理学 文化心理学 教育心理学 記号的媒介 相互作用分析

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究のねらい

近年、子どもの発達や教育と関連して「子どもの自分づくり」「自己の発達」にまつわる概念が様々な形で重視されている。しかし、子どもの自己とは、一次元的な尺度を用いて単一の観点から明確化できるもの、つまり、「自己が育っている子ども」と「育っていない子ども」を得点化して明らかにできるようなものではなく、むしろ、子どもの生活や子どもの表出する言葉を注意深く検討し、さらには子どもの自己を見てとる観察者のあり方にも目を向けて検討する必要があると考えられる。

本研究は、この「子どもの自己」について、特に学校教育においてみられる子どもの様々な表現に焦点をあて、その質的分析と、文化心理学に基づく理論的探究によって考察しようとしたものである。

(2) 本研究に至る研究代表者の研究

本研究を開始するまでに、研究代表者は以下の研究に取り組み、子どもが自分の経験について語る内容を収集、分析するとともに理論的考察を進めてきた。

幼児と家族(母親)による、保育での経験に関する会話の分析(2002～2004年度)

子どもの保育での経験に関する会話について、のべ13組の母子から合計100時間を超える継続的な録音記録を得るとともに、その分析枠組みを明確化した。保育の中で明確化する様々な観点から自他を位置づけるレパートリーが増加し、他者との関係の中の自己がより精緻に語られるようになる変化過程を示した。

保育・教育における「子どもの経験に関する語り」の検討(2005～2007年度)

の結果をふまえ、幼稚園での保育、小学校での日記指導など、学校教育の中で子どもの経験が表現される場面を検討した。保育場面については、継続的な観察を実施し、幼稚園教育の内容と関連づけつつ、日常的に自己を語ることの意義を考察した。小学校の教育実践については、小学校教諭へのインタビューと、3名の小学生が小学校5・6年生時に担任教諭の指導のもとで書いた日記計1567日分の分析を行い、下記の研究の基礎となる方法論を明確化した。

経験の表現による子どもの自己の構成過程に関する理論的・実践的研究(2008～2010年度)

の成果をもとに、子どもが自分自身の経験を表現することで明確化する「自己」の本質に関する理論構築を国際的な研究交流を通して行うこと、子どもが自分自身の経験を表現することの意義について、家庭や学校教育の実践と関連付けた考察と提言を、教員・保護者との交流を通して精緻化することを目標に行った。理論的考察については、文化心理学の著名な研究者である Jaan Valsiner

教授(当時米・Clark大学)の継続的な助言を受け研究を進め、"presentational self" (Komatsu, 2010) の概念をまとめて発表した。家庭や学校教育との実践への考察と提言については、文献研究を行い、新たに子どもの日記の分析を行った。

本研究は、以上の取り組みの結果を発展させ、考察を深めるべく計画された。

2. 研究の目的

本研究では、先に述べた代表者のこれまでの研究と、そこで構成された presentational self の概念を用いて、子どもの自己のあらわれとその発達をどのように記述できるかを理論的に考察し、かつ、データの分析から一定の実証的証左を得ることを目標とした。その際、従来研究代表者が主なデータとしてきた、家庭での母子の会話から対象を広げ、学校教育において、子どもの自己のあらわれが明確になると期待される活動、具体的には、スピーチ活動、日記・作文の指導、授業における討論などの場面を対象とすることで、教育実践との密接なつながりをもちながら考察することとした。

3. 研究の方法

本研究は、上記の目的のため

(1) presentational self 概念の理論的基盤である記号的媒介(semiotic mediation, Valsiner, 2007)の考え方と、その背景となるゲンシュタルト心理学・社会文化的な認識と発達の理論等について統合的理解を構成することにより、presentational self 概念を会話の分析にとどまらない理論的概念として精緻化する。

(2) この結果をふまえて、研究代表者がこれまで収集した資料(縦断的に収集された母子の会話のトランスクリプト・子どもの日記指導の記録)及び、研究代表者が共同で研究を行った小学校でのスピーチ活動の録音記録とそのトランスクリプトについて、記号論的アプローチに基づく分析を実施する。

(3) 以上の理論的・実証的研究は、いずれも子どもが自分自身の経験を物語る場面を対象としていたが、これをさらに幅広い教育実践へとつなぐため、小学校での授業の分析への適用を試みる。

という3つの手順による検討を行った。なお、これらの考察・分析に当たっては、引き続き Jaan Valsiner 教授(現、デンマーク・オーホルボー大学)を、1年に1回訪問し、教授のセミナーで研究発表を行うとともに継続的な助言を受けた。

4. 研究成果

(1) 理論的考察

Komatsu(2010)において、presentational self の概念は、保育での経験に関する子どもと母親の会話の記号論的分析をもとに提案された。つまり、会話においてターンテイキングを通して生じる意味構築の中で 語られた

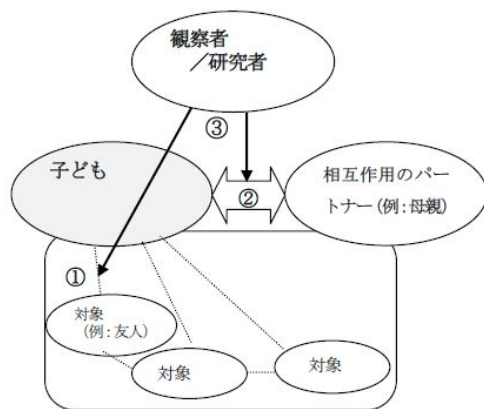
他者との関係 会話のパートナーである他者との関係という2種の他者との関係の中の固有の存在として、観察者にゲシュタルト質 (von Ehrenfels, 1988) として感受される自己として概念化された。そして、会話の中で絶えず意味が共有されつつ、分化が起こることが、観察者が語り手の自己の存在をみてとる根源にあると考えられた。

本研究では、この考え方をさらに拡張・一般化し、presentational self を、

表現者と表現において取り上げられ記述される対象との関係 (Figure 1 中、会話の分析では語りの中に登場する友人との関係を指す)

表現者とその相互作用のパートナーとの関係 (Figure 1 中、会話の例では、会話のパートナーである母親との関係の中の子どもの「ポジショニング」)

という2つの関係において観察者が感じ取る (Figure 1 中) ものとした。



は話題として取り上げられた (例 会話などにおいて語られた) 対象との関係の中の子どもの自身の明確化を、

は相互作用のパートナーとの間でなされる「ポジショニング」や関係形成を、は、から子どもの自己を読み取る観察者の視点を示す。

Figure 1 相互作用における presentational self に関する枠組み

そのうえで、この概念を、従来発達心理学で想定されてきた自己の概念、つまり、個の内面に想定される実体としての自己 という考え方と対比し検討した。従来の研究では、自己は、インタビューや質問紙調査への回答という形で明確化するものと考えられているが、本研究は、こうした研究協力者への問いかけとそれに対する回答も、presentational self で想定する対話的構造と同様のものであり、また、従来の研究においても、協力者の回答を「自己」として解釈する観察者の存在が潜在的に想定されていることを指摘した。そして、これらを含む複合的な意味構築作業としての「自己」をモデル化した presentational self 概念の意義を示した。

なお、以上の議論は主に Komatsu (2012)(論文) にまとめられるとともに、これをふま

えた考察を国内外の学会で発表した。

(2) 子どもの表現に関する分析

以上の理論的考察をもとに、子どもの表現に関する質的分析を実施した。

保育での経験に関する母子の会話

Komatsu (2010) は 1 ケースの母子の会話の縦断的な録音記録に基づく分析であったが、その後他の協力者に依頼し収集した記録を用い、保育での経験に関するもう 1 ケースの母子の会話 (2 年間, 192 日間, 計 59 時間) から事例の質的分析を行った結果をまとめた。その結果、Komatsu (2010) と同様に、保育で出会う友人を列挙 (enumerate) することが、子どもが意味構成を行いつつ自己の存在を明確化するいわば出発点として重要な役割を果たしていることを示した (Komatsu, 2013 図書)。

小学校でのスピーチ活動

(1) で述べた理論的精緻化をふまえた適用例として、小学校 5 年生のあるクラスで実施されたスピーチ活動 (クラスメートに対して自分の経験を語る活動) で記録された事例の分析を実施し、出来事の概略を順に述べるスタイルが崩され、出来事の細部へ視点が行きわたることや、自己の経験した感情をより生々しく表現することが、個々の固有の視点を明確にしうることを示した (Komatsu, 2012 論文)。

3 年生児童の日記

小学校 3 年生が家庭で書き、それに担任教諭がコメントする形で 10 カ月間続けられた日記 (26 名・632 篇) から抽出した例を用いて、子どもの自己の読み取りの可能性を論じた。日記の内容や他者への言及の頻度を数量的に示した上で、4 名の日記 (計 12 篇) から、この年齢の特徴とされる、経験した出来事を順序に沿って書く時系列的表現が意味構築の基礎になり、そこから、生じた出来事の細部、自身の内面、未来や過去などへの展開がみられることが、書かれた対象との関係における個々の子どもの固有性を読み手に意識させることを例示し、その過程で子どもの周囲の他者への言及が重要性をもつ可能性を論じた (小松・紺野, 2014 論文)。

(3) 授業の相互作用分析への適用

(2) で述べた分析をさらに幅広く教育実践へ結びつけるため、小学校 6 年生・国語の授業を継続的に記録・分析し、うち 1 単元 (計 7 回) を対象として考察した。その結果、授業の過程で、テキストとの多重な関係形成がなされており、音読のように定型化された身体性を伴うかわりにおいて個別の意味構築は制約されると考えられる一方、その後の問いかけにおいて担任教諭は個々の児童の固有の読み取りを明確化し、相互の関係の中に位置づけることを目指すこと、こうした相互作用と並行してなされた、書くことによる担任教諭と各児童の個別のかかわりの中で、

授業の相互作用にはあらわれない、より固有性の強い意味構成もみられることなどを示した。以上の結果は、これまで研究対象としてきた会話や日記の例とは異なるものの、授業の相互作用を通して子どもの自己を見て取る可能性を示した(小松, 2015 論文)。

<引用文献(本研究の成果以外)>

Komatsu, K. (2010). Emergence of young children's presentational self in daily conversation and its semiotic foundation. *Human Development*, 53, 208-228.

Valsiner, J. (2007). *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. New Delhi: Sage.

von Ehrenfels, C. (1988). On 'Gestalt qualities'. In B. Smith (Ed. and Trans.), *Foundations of gestalt theory* (pp. 82-117). Munich: Philosophia.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

Komatsu, K. (in press) Otherness is everywhere to bring about your self: An inquiry into the whimsical emergence of children's selves. *Annals of theoretical psychology*, vol.13, *Psychology as the science of human being*. DOI 10.1007/978-3-319-21094-0 (査読なし)

小松孝至 (2015) 小学校の教育実践と児童の自己: 授業の相互作用から自己のあらわれを捉える可能性めぐって 大阪教育大学紀要 第 部門 教育科学, 63(2), 53-64. <http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/28213> (査読なし)

小松孝至・紺野智衣里 (2014) 小学校3年生の日記における子どもの自己のあらわれ: 記号論的アプローチによる探索的考察 発達心理学研究, 25, 323 - 335. <http://ci.nii.ac.jp/naid/40020204104> (査読有)

Komatsu, K. (2012) Temporal reticence of the self: Who can know my self? *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 46, 357-372. DOI 10.1007/s12124-012-9199-6 (査読有)

[学会発表](計13件)

小松孝至 児童期の自己の発達と小学校の教育実践(4): 意味構築と自己のあらわれにおける他者性(otherness)の役割をめぐって 日本発達心理学会第26回大会 2015年3月20日 東京大学(東京都文京区)

Komatsu, K. Voices of storytelling and emergence of children's self in elementary school.

8th International conference on the dialogical self. 2014年8月22日 ハーグ(オランダ)

Komatsu, K. Finding out children's selves from a perspective of semiotic mediation: An analysis of children's diaries as homework. 1st International Congress of Humanities. 2014年6月4日 カウナス(リトアニア)

小松孝至 児童期の自己の発達と小学校の教育実践(3): 授業の相互作用から子どもの自己を捉える可能性をめぐって 日本発達心理学会第25回大会 2014年3月21日 京都大学(京都府京都市)

Komatsu, K. The emergence of children's self in educational settings: A semiotic perspective on the self in interaction. 15th Biennial conference of the International Society for Theoretical Psychology 2013年5月6日 サンティアゴ(チリ)

小松孝至・紺野智衣里 児童期の自己の発達と小学校の教育実践(2): 自己の存在を明確化する表現とその記号的媒介過程 日本発達心理学会第24回大会 2013年3月16日 明治学院大学(東京都港区)

小松孝至 子どもの表現のゆらぎと変化からみえてくるもの 日本教育心理学会第54回大会 2012年11月24日 琉球大学(沖縄県西原町)

小松孝至 児童期の自己の発達と小学校の教育実践(1): 日記からの「自己」の読み取りをめぐって 日本発達心理学会第23回大会 2012年3月9日 名古屋国際会議場(愛知県名古屋市)

[図書](計1件)

Marsico, G., Komatsu, K., & Iannaccone, A. (Eds.) (2013) *Crossing boundaries: Intercontextual dynamics between family and school*. Information Age Publishing. (pp. 109-133.)

6. 研究組織

(1)研究代表者

小松 孝至 (KOMATSU, Koji)
大阪教育大学・教育学部・准教授
研究者番号: 60324886